

あすたむらんど徳島 子ども科学館の教育的・社会的機能と存在価値 —利用者アンケート調査に基づく公共施設としての合理性の検証—

寺島 幸生（鳴門教育大学大学院学校教育研究科・准教授）

1. 調査の背景—科学教育・科学館の現状と課題—

科学技術立国を掲げる日本において、科学および科学技術の発展とそれに貢献しうる人材の育成は重要課題の1つである。それらの基盤として、子どもたちが理科を学ぶ意義や有用性を実感し、科学への関心を高められるように、日常生活や社会との関連を重視した理科教育や探究的な学習活動の充実が図られている。

国際数学・理科教育動向調査 TIMSS 2023 によると、日本の小中学生の理科・数学の学力は国際的に見て高く、小学生においては「理科の勉強は楽しい」「理科は得意だ」と回答する割合が近年上昇し、国際平均を上回っている（文部科学省・国立教育政策研究所, 2024）。一方、中学生においては「理科の勉強は楽しい」「理科は得意だ」「理科を勉強すると日常生活に役立つ」と回答する割合が小学生の場合から大きく低下し、国際平均を下回っている。また、理科や算数・数学への興味関心は、男子の方が女子よりも高い傾向にある。

全国学力・学習状況調査では、「理科の勉強が好き」「理科の授業で学習したことは将来社会に出た時に役立つ」と考える児童生徒ほど理科の正答率が高い傾向にある一方、社会経済的背景（SES: Socio-Economic Status）が乏しいほど各教科の正答率が低い傾向も確認されている（文部科学省・国立教育政策研究所, 2025）。また、正答率には有意な男女差が見られない一方、算数・数学、理科を得意と考える割合は、男子の方が女子より高いことが指摘されている。徳島県の小中学生においても、全国の小中学生とほぼ同様の傾向が確認されており、徳島県でも、理科や算数・数学の学習に対する好意や有用感を高める取組や、性差や社会経済的背景に起因する教育格差の解消が求められる。これらの課題を学校や家庭の努力だけで解決することは困難であり、家庭・学校・地域社会・行政が連携しながら科学教育を補完・充実していくことが必要である。

科学館に代表される理工系博物館は、社会教育施設として地域社会での科学教育において重要な役割を担っている。全国各館では展示物等を利用しながら、学校や家庭では得難い体験的な学びの場を広く社会に提供し、社会教育・生涯教育の面から科学教育活動に貢献してきた。しかし近年、多くの科学館・博物館が開館から数十年を経て、施設の老朽化、展示内容の陳腐化、予算・人員の削減、維持管理コストの上昇などの諸問題と、それに伴う利用者数の減少に直面し、教育効果および存在価値の維持に苦悩している。

2. あすたむらんど徳島の経緯と近況

あすたむらんど徳島（以下、あすたむらんど）は、遊びや体験を通して科学する心を育てる「子ども科学館」を中核に、科学工作などを提供する「体験工房」や、星空解説や関連番組を投影する「プラネタリウム」など、複数の体験型施設を有した科学と自然にふれることができる大型公園である（あすたむらんど公式ウェブサイトより）。徳島の豊かな自然と無限の可能性を象徴する施設として 2001（平成 13）年に徳島県によって設置され、2005（平成 17）年度までは県営、2006（平成 18）年度から現在は指定管理団体（株式会社ネオビエント）が運営する公設民営型の施設である。

あすたむらんどは 2025（令和 7）年度に開園 25 周年を迎え、これまでの入園者数はファミリー層を中心に累計 1,100 万人を超えている。近年の年間入園者数は 43 万人前後で安定的に推移している。一方、一部のアトラクションでは、機器の不具合や利用中止が頻発するなど、施設の老朽化に伴う維持管理上の問題も顕在化している。

あすたむらんどの今後の運営に関して、徳島県は施設のリニューアルや運営体制の刷新等を検討している。具体的には、後藤田正純徳島県知事は 2025 年 10 月 1 日の来年度入庁予定者内定式において、あすたむらんどを子ども向け職業体験施設「キッザニア」に似たテーマパークに変えたいとの意向を示した（徳島新聞社，2025a）。同県にぎわい政策課交流拠点室は、人口減少や少子化，レジャーの多様化などの社会情勢変化に対応し、今後も「にぎわい交流拠点」としての施設の魅力向上を図る目的から県民からの幅広い意見を募集しようと、あすたむらんどの今後の在り方に関するアンケート調査（調査期間：2025 年 12 月 1 日～2026 年 1 月 4 日，回答方法：電子申請サービスによる回答，回答者数：2,770 名）を実施した（徳島新聞社，2025b）。このアンケート結果は、徳島県公式ウェブサイト上で公開されている（徳島県，2026）。また，2026 年 2 月 16 日には、あすたむらんどの魅力向上や運営方法について話し合う検討会が開催され，入園・駐車場の有料化など，リニューアルに向けた基本構想の素案が示された（徳島新聞社，2025c）。素案では，あすたむらんどを徳島の自然や文化などに触れられる体験型テーマパークに再整備し，近年 43 万人前後で推移している年間入園者数を 60 万人に伸ばすことを目指している。「エンターテイメントを通じた学びの拠点」を施設の基本方針に掲げ，幅広い世代が遊びや体験を通じて徳島の自然や産業・技術，伝統文化に触れる「徳島にしかないテーマパーク」を目指すべき将来像としている。維持管理などに県が年 6 億円程度を負担している施設の持続可能な運営に向けて，入園と駐車場の有料化や施設利用料の見直しが検討されている。同県は今後パブリックコメントを行い，2026 年 4 月に基本構想を策定することを予定している。

3. 本調査・分析の目的

上述のように，徳島県はアンケートおよび検討会を実施しながら，あすたむらんどのリニューアルを検討している。四半世紀にわたって利用されてきた施設のリニューアルに当たっては，幅広い世代にまたがるこれまでの利用者が実感している効果や課題を正確に把握し，その知見を施設や運営の改善に生かすことが求められる。逆に，所有者や管理運営者側の価値観や意図だけが優先されてしまうと，利用者の真のニーズや便益が見落とされ，これまで中長期的に確立されてきた運営管理や利活用のノウハウ，教育的・社会的機能，地域社会における存在価値が失われてしまう恐れがある。

徳島県による上述のアンケートや検討会と並行して，あすたむらんど指定管理団体（株式会社ネオピエント）は，利用者目線からこれまでの取組の成果と課題を実体的に把握しようと，実際の入園者を対象とした大規模アンケート調査を実施した。その全回答データには，園内施設利用者の率直な意見・感想・要望等が反映されており，集計結果は同社から公開・報告されている（本稿および別添資料の中で一部掲載）。

本稿では，この調査結果を整理・考察しながら，あすたむらんど特に中核施設である子ども科学館が，どのような教育的・社会的機能を有し，どのような存在価値が認められているのか評価する。また，見出されたあすたむらんどの機能や価値を，今後も効果的に維持・発展させる上で重要となるリニューアルの方向性と同施設の発展可能性について提言する。

4. 調査・分析方法

2025年11月7日から2026年1月25日まで、あすたむらんど園内においてアンケートの実施を周知し、入園者にオンライン形式（Google フォーム）での回答を依頼した。この約3か月間の調査期間に総計3,099件の有効な回答が得られた。

具体的な質問項目・形式は別添資料のとおりであるが、年齢、性別、居住地（徳島県内・外）、現況（生徒、学生、主婦・主夫、会社員、無職等）、子どもの有無、子ども科学館・プラネタリウムへの来館経験の有無、長期来館経験の有無、記憶や印象に残っている体験・イベントやお気に入りの展示物等（自由記述）、来館による利用者自身の関心や行動の変化、子どもを科学館・プラネタリウムに連れてきた理由、子どもを科学館・プラネタリウムに連れてきた効果、子どもの頃に科学館・プラネタリウムがあった場合に仮定される効果、利用者にとってのあすたむらんどへの価値（自由記述）、科学館・プラネタリウムでの思い出エピソード（自由記述）、科学館・プラネタリウムの運営やイベントに関する意見等（自由記述）から構成される。

得られた回答に対して、単純集計および年齢等の属性によるクロス集計をそれぞれ行った。来館効果等を4択式で評価する質問への回答については、「おおいにある」「多少ある」を肯定的回答、「ない」「まったくない」を否定的回答として扱った。各クロス集計の結果（属性別の「おおいにある」「多少ある」「ない」「まったくない」の各回答数・割合）に対してカイ二乗検定を行い、クラメールの連関係数 V （肯定的／否定的の2群では ϕ ）を用いて属性と回答数の間の関連性の有無を判定し（ $V \geq 0.10$ ）、属性間の統計的な有意差を5%水準（ $p < .05$ ）で検出した。

5. 結果と考察

（1）あすたむらんど全体の全体像

単純集計の結果から、あすたむらんど徳島子ども科学館の来館者像および利用実態について、以下の全体的な傾向が確認された【図1～図10】。

来館者は20代から概ね50代までの子育て世代を中心に、10代（主に中高生・学生）から60代以上まで幅広い年代に分布している【図1】。性別に大きな偏りがなく【図2】、主に子ども向けの施設でありながら、親子での利用だけでなく【図3】、それ以外の年齢層も含めて、まさに老若男女が利用している。県内に限らず県外からの来館者も一定数存在し、広域的な集客を果たしている【図4】。利用者は特定の職種に限らず、中高生、親子、退職世代に至るまで多層的である【図5】。

来館回数および長期来館経験に着目すると、5回以上の多数回来館者の割合が最多であり【図6】、コロナ禍以前からの長期継続来館者が過半数を占めている【図7】。県内来館者では、5回以上の多数回来館者が約70%を占め、県外居住者では半数弱が初めての来館であるが、5回以上の多数来館者も20%を超えている【図8】。

好印象のイベントやお気に入りの展示物等として、「科学館の常設展示／常設イベント」に関する回答が最多で半数に達し、開館後25年を経た今でも、常設展示／常設イベントが好意的に利用されている【図9】。「プラネタリウム・星空」「公園遊具」「科学・実験イベント・工作」「体験イベント（季節イベント含む）」に関する回答も一定数存在し、園内の各施設・イベントは概ね好評を得ている。

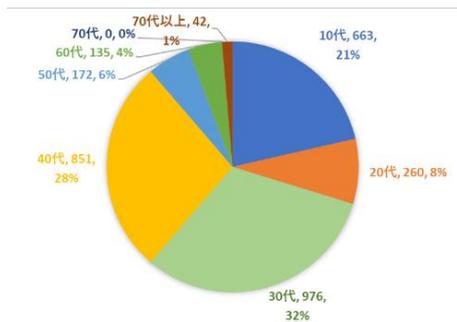


図1 回答者の年代

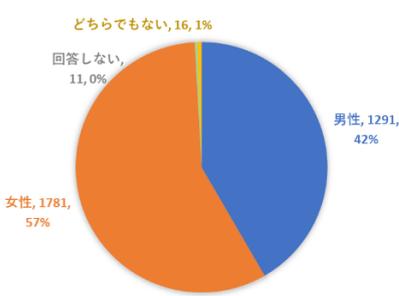


図2 回答者の性別

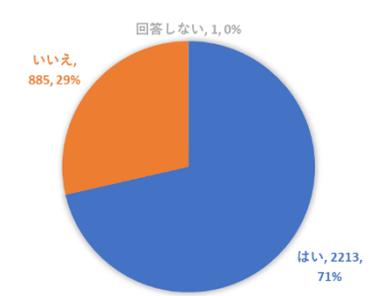


図3 回答者の子どもの有無

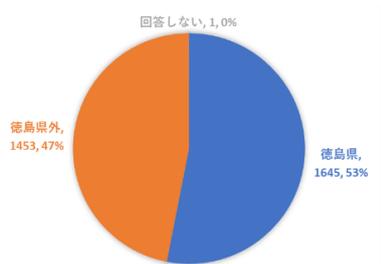


図4 回答者の居住地

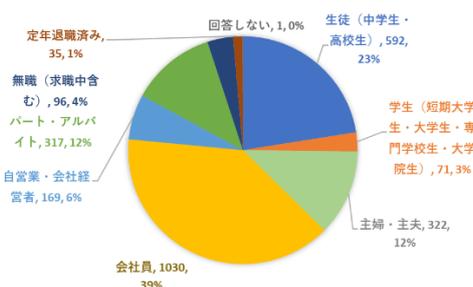


図5 回答者の現況 (職業等)



図6 累計来館回数

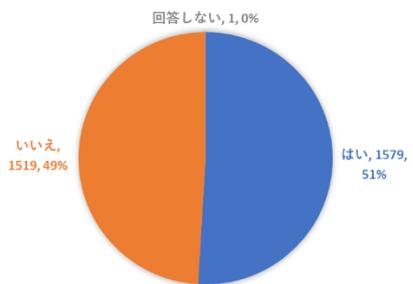


図7 2001~2018年の長期来館経験の有無

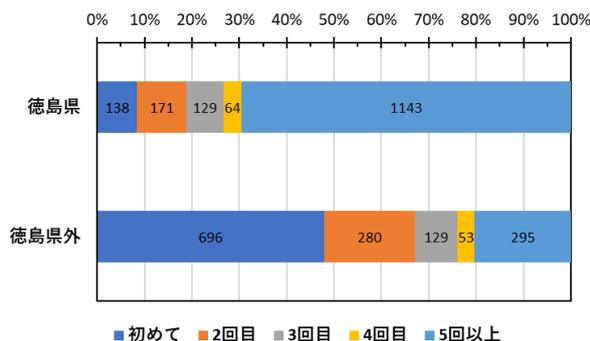


図8 県内/県外居住者の来館回数

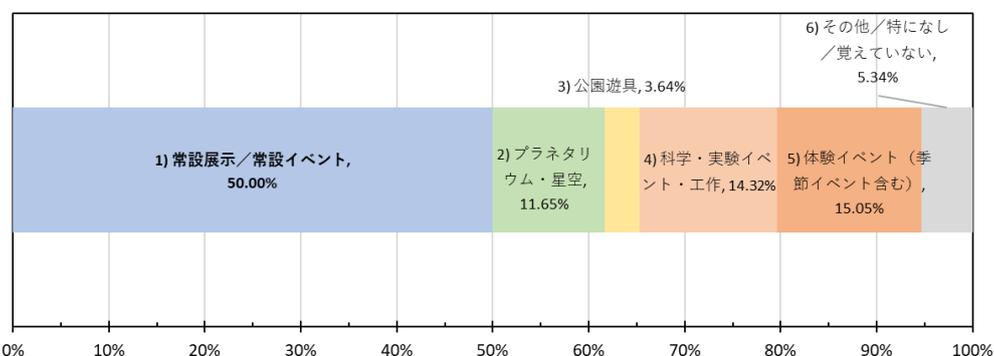


図9 好印象のイベントやお気に入りの展示物

同アンケートでは、来館者が子ども科学館・プラネタリウムをどのような価値を持つ施設として認識しているかについても調査している。「あなたにとって、子ども科学館やプラネタリウムはどのような

存在ですか？」の質問（自由記述）に対する回答を、記述内容に応じて「学び支援」「体験・探究」「家族・思い出」「癒し」「社会的価値（生涯学習・公共性）」に分類・集計した結果を【図 10】に示す。

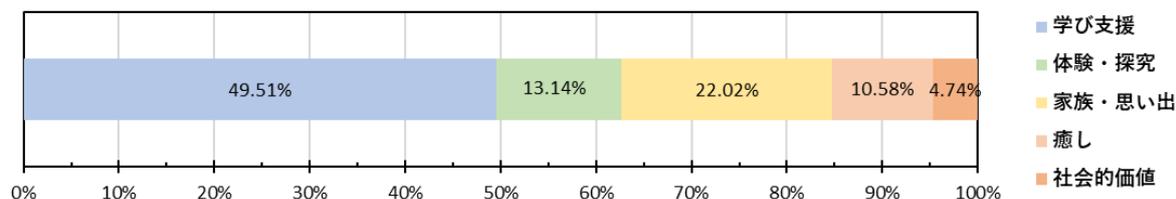


図 10 利用者から見たあすたむらんの価値認識

「学び支援」には、「学習」「教育」「知識」「理解」「科学」など、科学や自然への興味関心の喚起、授業や解説への好意、自発的な学習行動の促進などに関する記述が主に含まれる。

「体験・探究」には、「実験」「不思議」「見る」「触れる」「やってみる」「イベント」「アトラクション」など、体験を通じた試行的・探究的な行動に関する記述が主に含まれる。

「癒し」には、「落ち着き」「安らぎ」「リラックス」「リフレッシュ」「気分転換」など、来館し体験したこと自体を価値として認識していることを示す記述が主に含まれる。

「家族・思い出」には、「親子」「孫」「一緒」「団らん」「お出かけ」「休日」など、癒しや余暇の場としての認識を示す記述が主に含まれる。

「社会的価値」には「地域」「社会」「未来」「必要・必須・不可欠」など、個人や家族単位の満足にとどまらず、地域における学習機会の提供や公共的な学びの拠点としての認識を示す記述が主に含まれる。

全体的には学び支援に関する回答割合が約 50%と最多であるが、体験・探究、家族・思い出、癒しの場としての利用などの回答も一定数存在し、公共的な施設としての社会的価値も認められている。以上の結果から、子ども科学館・プラネタリウムは、科学に関する学習施設という科学館の本質的機能だけでなく、利用者のウェルビーイングにも貢献する多面的価値を有する施設として機能していると評価できる。

（2）利用者属性別に見た来館効果

利用者が実感している来館効果として、以下 1)～4) の各観点について、利用者の属性（年代・性別・居住地・現況）間で見られた共通点や相違点を整理・考察する。

- 1) 「理科・生物・地学・天文・物理・化学に対する興味関心が高まった」（以下、「興味関心の向上」）
- 2) 「学校での理科や天文の授業が好きになった」（以下、「授業への好意」）
- 3) 「自分で実験や観察をするようになった」（以下、「実験・観察行動」）
- 4) 「星や月を観察するようになった」（以下、「星や月の観察」）

各効果に対する肯定的回答（「おおいにある」＋「多少ある」）の割合は、どの性別・居住地・年代・現況（職業等）においても概ね 70%前後かそれ以上の多数を占め、全体的には特定の属性に偏らず幅広い層で各効果が安定的に認められた【図 11, 図 12】。

男女間で各効果に対する肯定的回答の割合に有意な差が見られなかったことから、子ども科学館が性別によらない公平な教育的機能を有することが確認された。同館がこの機能を継続的に発揮することで、理系分野への興味関心におけるジェンダーギャップ解消に向けて貢献していくことが期待される。

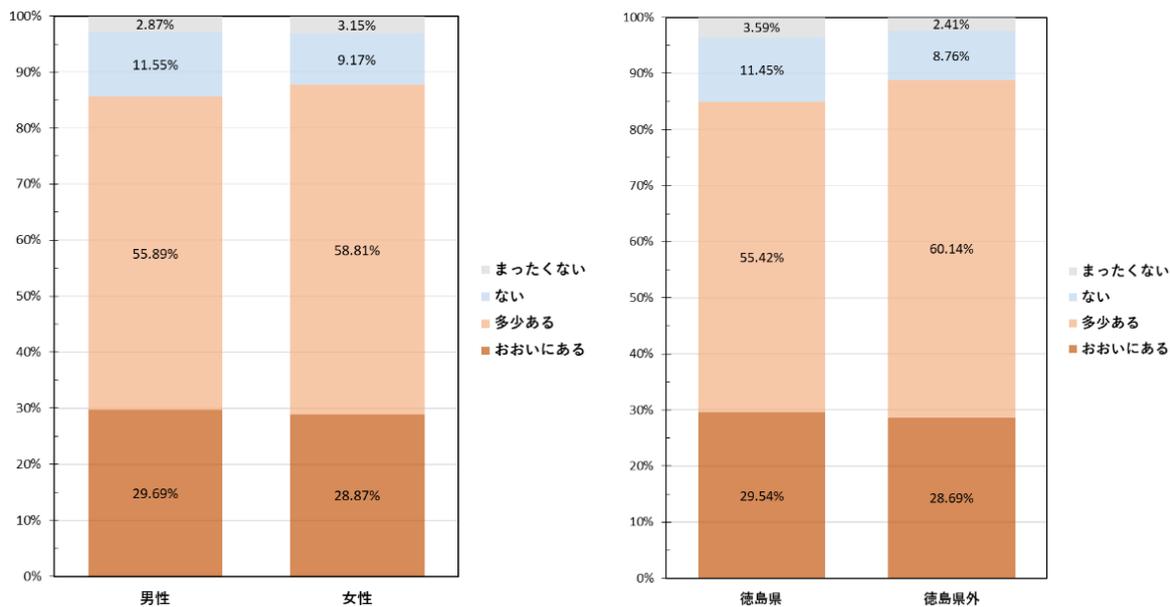


図 11 利用者の性別（左）および居住地別（右）に見た「興味関心の向上」に対する来館効果の実感

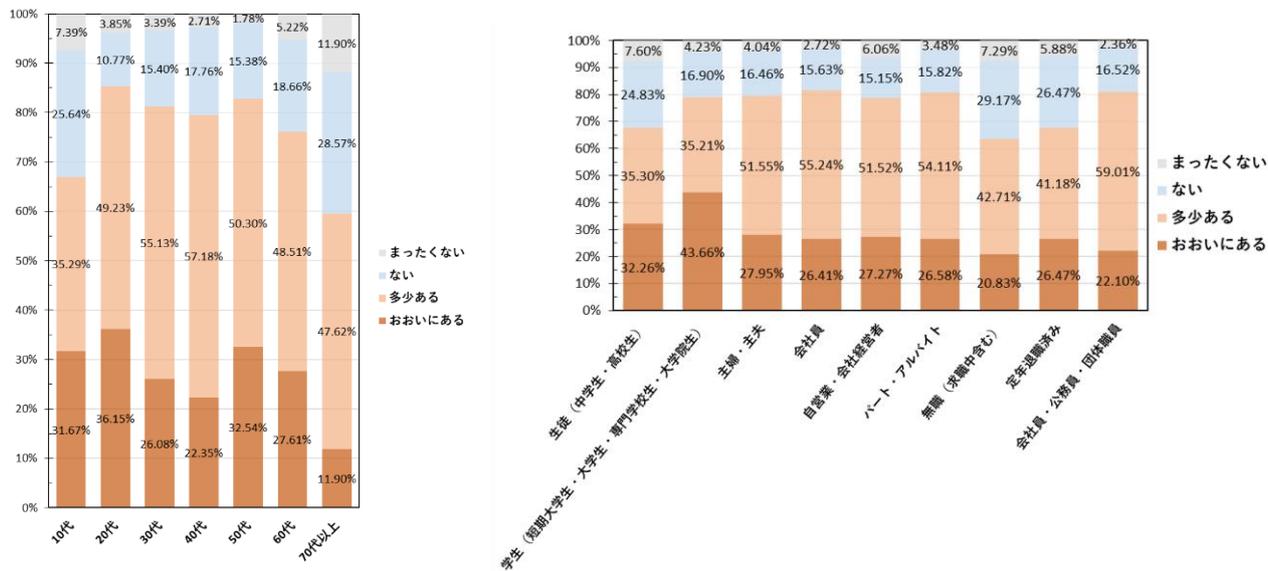


図 12 利用者の年代別（左）および現況別（右）に見た「星や月の観察」に対する来館効果の実感

年代・職業等と各効果実感との間には、以下のような関連性が確認された。「興味関心の向上」に関して、20・30代および40・50代の肯定的回答の各割合は、10代、60・70代の各割合よりも有意に高い ($\chi^2(3) = 60.305, V = 0.140, p < .01$)。「星や月の観察」では、20・30代および40・50代の肯定的回答の各割合は、10代の同割合よりも有意に高い ($\chi^2(3) = 64.068, V = 0.144, p < .01$)。また、生徒（中学生）・学生（大学生等）を除く社会人層における「星や月の観察」および「興味関心の向上」に対する各肯定的回答の割合は、生徒の各割合よりも有意に高い（星や月の観察行動； $\chi^2(2) = 42.642, V = 0.117, p < .01$ 、興味関心の向上； $\chi^2(2) = 31.462, V = 0.101, p < .01$ ）。一例として、【図 12】では来館者の「星や月の観察」への効果実感の度合いを利用者の年代別（左）および現況別（右）に比較して示している。肯定的回答が比較的多い20代～50代の社会人層の多くは子育て中（回答者全体の約74%、子ども有り約70%）であり、主として小学生～高校生の親世代に相当する。以上の結果から、特に保護者層が来館効果を強く

実感しており、子どもと来館し様々な体験を共有する中で、保護者自身も天体観察への行動や科学への興味関心を喚起していることが推察される。

一方、10代および生徒において効果実感が比較的弱いことから、現役の中高生や学生の科学に関する興味関心や行動をより効果的に促す展示や体験等を充実していくことが今後の課題と言える。

(3) 来館頻度・期間と効果実感

来館回数および長期来館経験の有無と来館効果との関係について整理・考察する。初回来館者から5回以上の多数回来館者まで、上記1)～4)の各効果に対する肯定的回答の割合は共通して70%前後の多数を占めており、来館回数による有意な差は確認されなかった【図13】。また、長期的な来館経験の有無にかかわらず、各効果に対する肯定的回答の割合は70%前後と多数を占めている。これらの結果から、初回来館者から長期のリピーターまで、一定の来館効果を実感していると判断できる。

長期来館経験者では、「おおいにある」の回答割合が相対的に高く、来館効果をより強く実感している傾向が見られた。実際に、長期来館経験がある層の「星や月の観察」や「授業への好意」に対する各肯定的回答の割合は、ない層の各割合に比べて有意に高いことが確認された(星や月の観察; $\chi^2(3)=53.343$, $V=0.131$, $p<.01$, 授業への好意; $\chi^2(3)=34.704$, $V=0.106$, $p<.01$)。

以上のアンケート結果が示すように、子ども科学館は、初回利用者から多数回利用者に至るまで、科学への興味関心や授業への好意、実験・観察および星や月の観察といった意識や行動を喚起する教育的機能を有している。特に長期継続来館者に対して、星や月の観察のような日常生活に波及しやすい行動面への効果がより強く表れている。同館は、初回利用者に対して学びへの入口として機能しつつ、継続して来館を積み重ねる利用者に対してより高い教育効果を発揮してきたと評価できる。

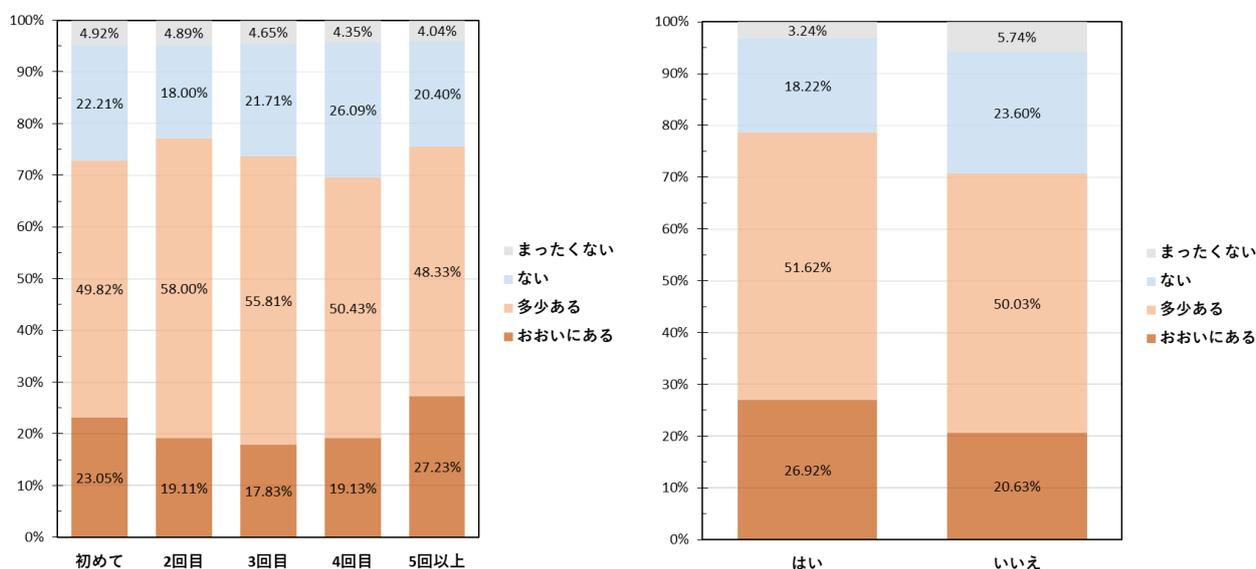


図13 来館回数別（左）および長期来館経験の有無（右）で見た「授業への好意」に対する来館効果

(4) 保護者から見た子どもへの効果

来館が子どもに与える効果について、保護者の回答に基づいて整理する。1) 来館者の子の有無, 2) 来館動機の各観点からアンケート結果を整理・分析し、家族で来館する意義について考察する。

1) 子の有無による効果実感の違い

「授業への好意」「実験・観察行動」「星や月の観察」「子の学校の成績向上」に対する各肯定的回答の割合は、子ども有・無いずれの利用者でも半数を超え、各効果が安定して認識されているが、子どもがいる利用者の各肯定的回答の割合は、子どものいない利用者の各割合よりも有意に高いことが確認された（授業への好意； $\chi^2(3)=259.798, V=0.300, p<.01$ 、実験・観察行動； $\chi^2(3)=211.443, V=0.271, p<.01$ 、星や月の観察； $\chi^2(3)=227.417, V=0.281, p<.01$ 、子の学校の成績向上； $\chi^2(3)=106.122, V=0.192, p<.01$ ）

【図 14】。特に、「授業への好意」「実験・観察行動」「星や月の観察」の3項目では、「子の学校の成績向上」に比べて肯定的回答の割合がより高く、子どもの有無と効果実感の間に比較的強い関連性があることが統計的に検出されている（ $V \geq 0.25$ ）。これらの結果から、保護者層は子どもに対する情意・行動面での来館効果をより強く実感しており、子どもを伴う来館は、家庭内で科学に関する親子の会話や行動を促し、家庭教育においても重要な役割を果たしていると考えられる。

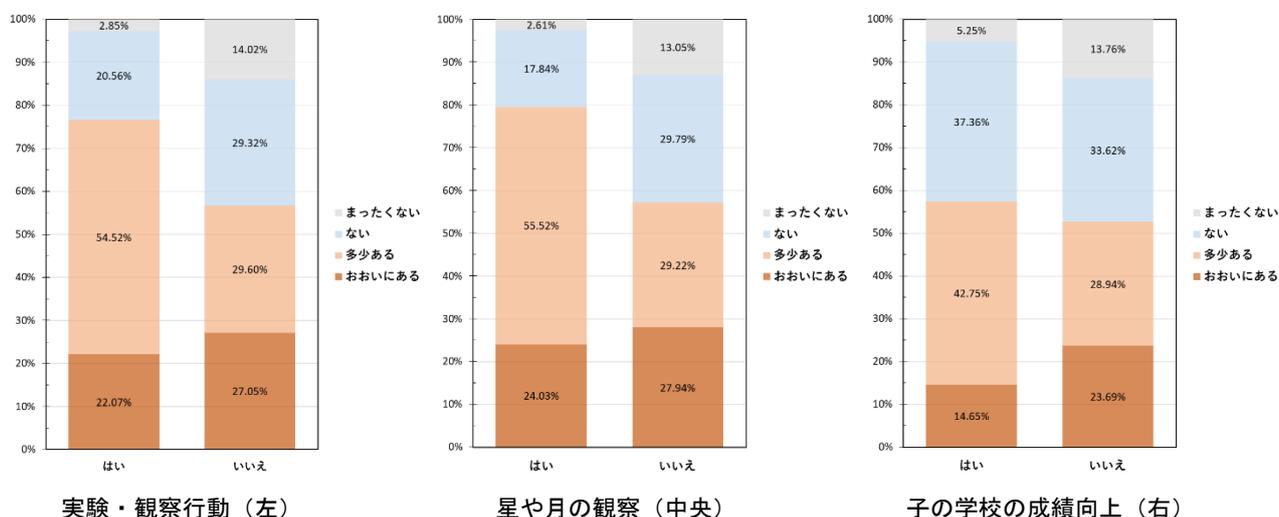


図 14 子どもの有無（はい／いいえ）による子に対する効果実感の比較

2) 来館動機（教育・情緒・利便性）と効果実感

来館動機別にみると、「学校以外で学ぶ場を体験させたかった」「子どもに科学・天文に興味を持ってほしい」などの「教育的理由」で来館した層が、子どもへの効果を最も肯定的に捉えている傾向が確認された。一例として、「授業への好意」に対する効果を来館動機別に比較して【図 15】に示す。「教育的理由」で来館した保護者の「授業への好意」「実験・観察行動」「星や月の観察」「子の学校の成績向上」に対する各肯定的回答の割合は、それ以外の理由での来館者の各割合に比べ有意に高いことが確認された（授業への好意； $\chi^2(3)=176.820, V=0.247, p<.01$ 、実験・観察行動； $\chi^2(3)=144.456, V=0.224, p<.01$ 、星や月の観察； $\chi^2(3)=151.724, V=0.229, p<.01$ 、子の学校の成績向上； $\chi^2(3)=60.418, V=0.145, p<.01$ ）

【図 15 左】。

「自分が子どもの頃に楽しかった」「家族の団らん・思い出づくり」「子どもが喜ぶから」「自分自身が行きたい」などの情緒・体験的な動機による来館者においても、「授業への好意」「実験・観察行動」「星や月の観察」の3項目において、それ以外の理由での来館者に比べて肯定的回答の割合が有意に高いことが確認された（授業への好意； $\chi^2(3)=115.697, V=0.200, p<.01$ 、実験・観察行動； $\chi^2(3)=72.569, V=0.159, p<.01$ 、星や月の観察； $\chi^2(3)=104.258, V=0.190, p<.01$ ）【図 15 中央】。

一方、「アクセスの良さ」「経済的負担が少ない」といった「利便性」を主な理由とする来館であっても、各効果が極端に低下する傾向は見られなかった【図 15 右】。

以上の結果から、家族での来館は、動機によらず子どもたちの科学に関する興味関心や具体的行動を喚起する一定の効果を有していると評価できる。館内で得た体験が家庭に持ち帰られ、親子や家族の間で共有されることで、家族単位で科学に関する意識や行動が日常的に変容している可能性が示唆される。

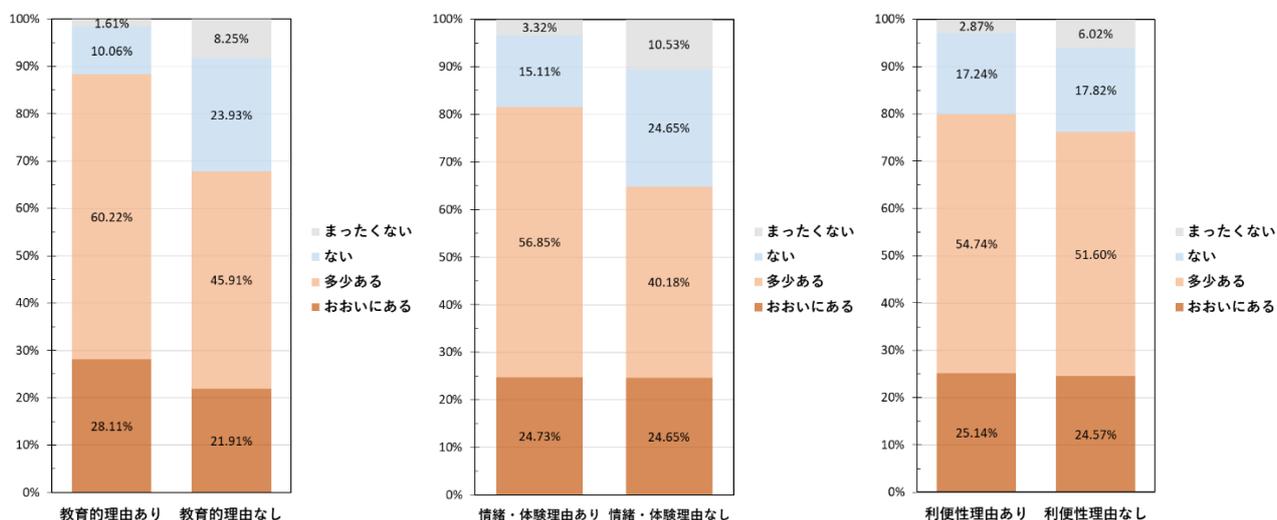


図 15 来館動機別に見た「授業への好意」に対する効果

(5) 親子間における来館効果の相関

親が自身に対して感じる来館効果と子に対して感じる来館効果が、互いに関連していることを示す結果が確認されている。

親が自身および子への効果を強く感じている「授業への好意」「実験・観察行動」「星や月の観察」に対する各回答について、親自身への効果に肯定的／否定的、子への効果に肯定的／否定的の2×2クロス集計で整理し、親子間での効果の関連性について検討した【表 1】。その結果、上記3項目全てにおいて、親自身の効果実感と子への効果実感の間には強い関連があり、親が自身への効果を実感している場合には、子への効果も実感している割合が有意に高いことが統計的に認められた（授業への好意； $\chi^2(1) = 248.707, \phi = 0.335, p < .001$ 、実験・観察行動； $\chi^2(1) = 307.166, \phi = 0.373, p < .001$ 、星や月の観察； $\chi^2(1) = 553.458, \phi = 0.500, p < .001$ ）。さらに、自身と子への両効果を実感する親の割合は、3項目全てで70%前後に達し、両効果否定者の割合（3項目とも10%前後）に比べて圧倒的に多いことも明らかとなった。

表 1 親自身および子への各来館効果に対する肯定的／否定的回答のクロス集計表

		親自身への効果					
		授業への好意		実験・観察行動		星や月の観察	
		肯定	否定	肯定	否定	肯定	否定
子への効果	肯定	1,557 (70.4)	252 (11.4)	1,473 (66.6)	196 (8.8)	1,566 (70.8)	169 (7.6)
	否定	206 (9.3)	198 (8.9)	290 (13.1)	254 (11.5)	197 (8.9)	281 (12.7)

数値は人数（括弧内%）

以上の結果から、保護者の多くが自身および子への両来館効果を実感し、来館のたびに得られた経験や知見が親子間で共有・蓄積されていると推察される。今回確認された親子間の効果の関連性は、子ども科学館が、来館時だけでなく、その後も家庭内・世代間で学習効果を広げる場として機能していることを示す証拠であり、同館の教育的・社会的機能と存在意義を裏付ける中核的な知見と位置付けられる。

6. あすたむらんの教育的・社会的機能および存在価値

上述のアンケート結果とその分析から、あすたむらんどが有する教育的・社会的機能および存在価値は以下のように総括される。

- 家族連れを中心に、年代・性別・居住地・職業・来館回数等によらず幅広い層が利用している
- 県内リピーターが多数を占めながら、県外リピーターも一定数存在し、安定的な集客力を持つ
- 子ども科学館の常設展示／常設イベントを中核に、プラネタリウム、公園遊具、工作、体験イベントなど、幅広いサービスにおいて根強い人気を維持している
- 教育、体験、家族の思い出作り、癒しなどの多様な動機・目的で継続的に利用され、地域に不可欠な公共施設として定着している
- 子育て世代や長期来館経験者は、理科学習への好意、家庭での自発的な実験・観察、星や月の観察など、科学への意識・行動の広がりにおける教育的効果を特に強く実感している
- 来館効果が親子間で強く関連しており、同施設が提供してきた学びや体験は家族内・世代間で共有・波及している

以上のように、子ども科学館を中核とするあすたむらんどは、単なるエンターテイメント施設や一時的な集客拠点ではなく、多様な機能や価値を併せ持つ多面的な公共施設として地域社会に根付いていると結論付けられる。

実際に、開館25年を経た現在でも、あすたむらんどの利用者数は堅調に推移しており、質・量ともに着実に利用されている実態が確認されている。【図16】は、徳島県人口（右軸）と、県人口千人当たりのあすたむらんど、同子ども科学館、同プラネタリウムの各年間利用者数（左軸）の推移をそれぞれ示している。

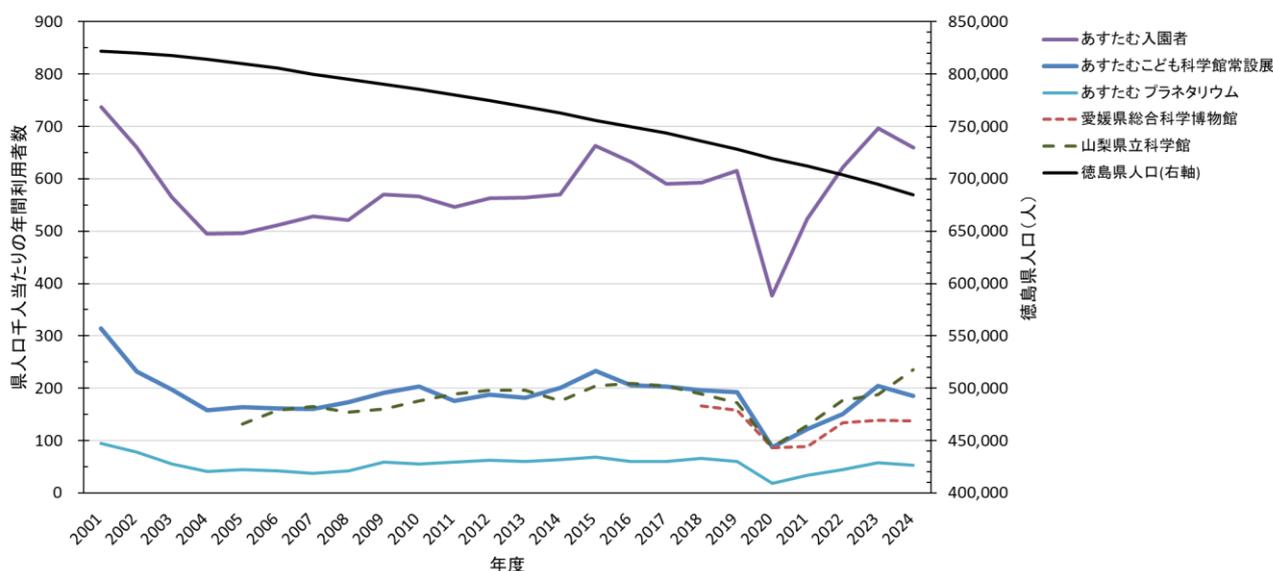


図16 あすたむらんど各施設の年間利用者数（県人口比）および徳島県人口の推移

同図には、子ども科学館と比較可能な同規模の科学館として、徳島県と同規模人口を擁する山梨県の「山梨県立科学館」、地理的に比較的近い愛媛県の「愛媛県総合科学博物館」の各県人口比利用者数を併せて示している（いずれも各館公開データより）。徳島県人口は、あすたむらんどが開館した2001（平成13）年度には、約822,000人であったが、2024（令和6）年度には約685,000人と、この24年間で人数にして137,000人、率にして約17%（年平均約0.7%）減少している（政府統計の総合窓口 e-Stat より）。一般的には、人口減少に伴って利用者も減少することが想定されるが、県人口比でのあすたむらんど入園者数は、指定管理団体による運営が始まった2006年度以降、コロナ禍期（概ね2020～2022年）を除いて、むしろ微増傾向にある。有料施設である子ども科学館およびプラネタリウムの県人口比利用者数も長期的に安定して維持されており、コロナ禍以降は微増傾向に転じている。子ども科学館の県人口比利用者数は、首都圏に比較的近い山梨県立科学館と比較しても同程度、四国内の愛媛県総合科学博物館と比べてやや優位な集客を達成している。

7. 今後のリニューアルの方向性や発展可能性

上述のあすたむらんどが多面的な機能・価値および実績を踏まえると、リニューアルに際しては、子ども科学館を全面的な施設再編の対象とするのではなく、既に利用者から広く認められている教育的・社会的機能や存在価値を維持しつつ、それらをより効果的なものへと深化・更新していく対象として検討されるべきだと言える。

アンケート結果が示すように、子ども科学館は、学校や家庭では得難い体験的な学びの機会を性別や年代を問わず広く社会に提供し、自然科学系博物館という社会教育施設としての役割を果たしてきた。本稿冒頭で指摘した科学教育上の諸課題、とりわけ理科学習への好意や有用感を高める取組や、性差や社会経済的背景に起因する教育格差の解消などにおいて着実に貢献してきたと言える。これらの実績は、国連が掲げる持続可能な開発のための目標 SDGs の目標4「質の高い教育をみんなに」（だれもが公平に、良い教育を受けられるように、また一生に渡って学習できる機会を広めよう）の達成にも寄与するものだと高く評価できる。

一方で、10代や現役中高生において来館効果の実感がやや弱かったことや、本稿では割愛した利用者から自由記述で寄せられた具体的な改善要望等も考慮すると、今後の改善・発展に向けて以下のような取組も検討すべきだと考えられる。

- 家族来館を軸とした展示・体験設計と情報発信を強化し、家庭内での学びの波及を促進する
- 初回来館者に対して分かりやすく体験しやすい展示設計を維持しつつ、リピーターに対しては探究性を深めるプログラムを充実する
- 館内の展示・体験の充実と並行して、来館困難な利用者向けに館外のアウトリーチ活動を拡充する
- 現役の中高生が来館効果をより強く実感できるような学びの機会（例えば、学校での授業、探究学習、キャリア教育等と関連付けが容易な展示・体験等）を充実する
- 市民科学などの市民参加型調査研究や、科学および科学教育に関する交流活動の拠点としての可能性を模索する
- 今回のアンケートで効果実感層から寄せられた具体的な改善要望等を、施設の成熟度を高めるための資源として活用し、具体的な改善策をできるだけ速やかに計画し実行する

これらの取組により、あすたむらんど徳島子ども科学館は、少子化や人口減少が加速する徳島県においても、多面的機能・価値を備えた公共的学習拠点としての役割を今後も持続的かつ発展的に果たしていくと期待される。

8. おわりに

本稿では、あすたむらんど入園者を対象に実施されたアンケート結果に基づき、子ども科学館が多面的な価値を有する公共施設として、幅広い層から愛されているという具体像を明らかにした。同館は開館以来 25 年という中長期にわたって、物理的インフラにとどまらず、家族や社会における関係的インフラとしても機能してきたと言える。この背景や要因を単純に断定することはできないが、同館が科学館として単独で存在するのではなく、体験工房や野外遊具などの複数の体験型施設を併設するあすたむらんどという複合公園の中にあることで、各施設の機能が相乗的に発揮されている可能性が考えられる。また、駐車場無料や施設利用料が比較的安価であることは、来館の経済的負担や心理的ハードルを低減し、社会経済的背景による教育格差や体験格差を是正する上でも有効だと考えられる。もちろん、あすたむらんど関係職員の日々の努力と工夫、指定管理団体による適切な管理運営、徳島県の財政支援、利用者および地域住民の理解と協力は、あすたむらんど・子ども科学館を支える必要不可欠な要素である。

今回のアンケートは、実際の入園者 3,000 名超の回答を得て、あすたむらんど・子ども科学館のこれまでの取組の成果と課題を具体的に評価した同館初の大規模調査であり、得られた知見は、同園・同館の今後の事業展開やリニューアルの方向性を検討する上で、決して無視できない確かな科学的根拠となるものである。また今回の結果は、利用者数確保や施設更新等の課題に直面する全国の各科学館にとっても有益な情報を与える資料だと言える。

県および指定管理団体の双方が、今回の調査結果と徳島県実施のアンケート結果を相補的に活用し、県民や利用者のニーズや便益に配慮しながら、あすたむらんど事業の継続性やリニューアルの方向性を合理的かつ協調的に検討していくことを期待する。あすたむらんど・子ども科学館が、徳島県における科学教育の拠点として、今後もその機能を維持・発展していくことを切に願っている。

参考文献

- あすたむらんど公式ウェブサイト <https://asutamuland.jp/about/>
- 文部科学省・国立教育政策研究所 (2024) 「IEA 国際数学・理科教育動向調査 TIMSS2023 の結果 (概要)」
https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/timss/2023/gaiyou.pdf
- 文部科学省・国立教育政策研究所 (2025) 「令和 7 年度全国学力・学習状況調査の結果 (概要)」
<https://www.nier.go.jp/25chousakekkahoukoku/report/data/25summary.pdf>
- 総務省統計局・独立行政法人統計センター「政府統計の総合窓口 e-Stat」 <https://dashboard.e-stat.go.jp/timeSeriesResult?indicatorCode=0201010000000010000>
- 徳島県公式ウェブサイト「徳島県立あすたむらんどのあり方見直しに係る県民アンケート結果について」
2026 年 2 月 25 日 <https://www.pref.tokushima.lg.jp/ippannokata/kyoiku/kanko/7310880/>
- 徳島新聞社 (2025a) 徳島新聞デジタル版 2025/10/2 05:00 「あすたむらんど徳島を「キッザニア」に 後藤田知事意向、担当課「未定」」 <https://www.topics.or.jp/articles/-/1313973>
- 徳島新聞社 (2025b) 徳島新聞デジタル版 2025/12/04 18:00 「あすたむらんど徳島の今後の在り方を考えよう 県がアンケート調査を実施」 <https://www.topics.or.jp/articles/-/1349182>
- 徳島新聞社 (2025c) 徳島新聞デジタル版 2026/02/17 05:00 「あすたむらんど徳島の在り方を検討 入園・駐車場の有料化など、リニューアルに向け基本構想の素案示す」 <https://www.topics.or.jp/articles/-/1385560>